黒埼町の今昔

執筆　宮田栄門

黒鳥の芸能活動(一)

緒立八幡宮にこまいぬを奉納すべく

大正末、黒鳥で遊芸団が結成される。

明治四十年代末期、「黒鳥役者」の活動が後継者難から一時、途絶えていたころのこと。本間権松と江端常蔵の二人は、保苅権蔵、籏本由松、江端仁吉、江端慮平、らを誘い踊りのグループを作った。

保苅、籏本らはともに木場演芸部の出身で、保苅は木場伝統の棒踊りの名手、籏本は笛・太鼓となんでもこなす芸達者だった。彼らを誘った本間、江端も、役者の血を引く芸能好きな若者で、保苅らから棒踊りを習うと、それに村に残る役者の「狂言」などをまじえて村の催しの時などに出演し、「棒踊り仲間」と呼ばれていた。稽古は、長池のはたにあった火葬場でよくやった。やがて、本間忠治や本間庄太郎らも仲間に加わった。

遊芸団が結成される

大正十四年暮れ「緒立八幡宮敬神遊芸団」が黒鳥でつくられた。中心的な役割を果たしたのは「棒踊り仲間」の後輩の本間忠治だった。結成にかかわったのは、棒踊り仲間で音頭取りの江端仁吉、本間庄太郎、拍子方の古川吉蔵、五十嵐次郎、阿部勇三郎、大橋金一郎、狂言の森正、保苅末一、踊り手の保苅清、本間健吾、渡辺新平、阿部清蔵、佐藤清治、小松正一、大橋清蔵、本間健治、相田首治らで、間もなく本間省吾も加わった。いずれも昔、役者の多く出た黒鳥一～三番組の者が多かった。この結成を全面的に支援したのが本間権松、江端常蔵ら「棒踊り仲間」の人たちだった。

緒立八幡宮狛犬奉納の記念写真（昭和５年４月16日撮影）前列右から本間忠治、江端年徳、新潟石屋、鷲尾精治、小泉健夫、鷲尾三吉、鷲尾関太郎、鷲尾、竹野竹松、旗本由松、前から第２列右から本間しし蔵、本間権松、石屋、大橋寅治、大橋末蔵、森、小松正一、保苅権蔵、阿部末蔵、江端仁吉、保刈末二、大橋金一、後列右から江端常蔵、間質治、阿部清太郎、保苅久平、本間健吉、保刈清、本間省吾、間徳七、佐藤清治、本間健治、本間正太郎、渡辺修平、江端伴一

「遊芸団」結成の目的は、昔の「黒鳥役者の巡業」の発想で、踊りや芸を習って近隣町村を回り、その奉加金で八幡宮にこまいぬを奉納することだった。当時の日本の国民の敬神の念は、今の人の想像できないほど強く、黒鳥の若者たちは村社八幡宮に御奉仕しようと考えたのである。

遊芸団の踊りの種目

遊芸団の踊りの種目は「なぎなた踊り」「棒踊り」「手踊り」「花笠踊り」「神楽舞」「八木節」などで、ほかに役者からの伝統の「狂言」（芝居のお笑いのようなもの）は森正や保苅末一など芸達者がおり面白くて定評があった。

黒鳥の踊りで代表的なのは「なぎなた踊り」である。唄は「さきーはーなぎーなーたー、あとーそびーがたーなー、どちらーが切れるやーら切れぬやーらー」などというもので、踊りは二人太刀と三人太刀があって、男が太刀を持ち、女役がなぎなたを持って踊る。衣装は、女役が真赤なジュバンにたすきをかけ、男はゆかたを尻ばしょり、たすきがけだった。

「花笠踊り」「手踊り」はどちらも同じ唄で「ひがしーやーさー、かやーばーの、おかんじょーがー、てぬぐいー、はがいーそろえて立つとこやさーいー」。たいてい四人踊りで、衣装はとうちりめんに裏つきの女の長着を着た。

ほかに「木場の棒踊り」小平方の「神楽舞」「玉遊び」なども覚え、昭和二年春には、皆かなりの芸達者になっていた。そのころからこまいぬ奉納の活動が始まった。

「下は小新から青山あたりまで、西郷は大関番屋、曽根、巻の近くまで行き、農家などの大きな家を借りて興行をぶった。そのころは自転車はもちろんリヤカーもなかったので、社壇は持っていかず、太鼓など地方の道具や衣装など、てんでがそれぞれ風呂敷にかついで歩いていった。興行は夜ばかりだったので、ほとんどそこに泊めてもらった。板井にも興行し、終わってからみんなで共同風呂に入りに行ったことを覚えている」（本間省吾さんの話）

興行は三年、四年と続けられ、黒埼の各部落、内野、曽ノ木、白根と門付巡業に何回か出て、五年正月（二月）ころには、奉加金も「こまいぬ奉納」の目標額に達した。

同年四月十六日、緒立八幡宮で、遊芸団員、村役員が集り、奉納の式が行われ、こまいぬが据付けられた。四年がかりの奉加の事業に参加した団員、役員の名前は、現在も境内にあるこまいぬの台座に刻まれている。

なぎなた踊り（戦前の絵ハガキ）

昭和八年ころ、新潟市で新潟大博覧会が開かれ、併設会場で県下芸能大会が行われた。黒埼からは「黒鳥のなぎなた踊り」「木場の棒踊り」「小平方の神楽舞」「板井の法念踊り」などが出演した。

この時の模様を、父・江端常蔵に連れられて博覧会を見に行った義栄さんは次のように語ってくれた。「私が十歳くらいの時だった。石屋小路からコウレンボーに乗って万代橋東詰の下手で降りた。万代橋下手付近を昔、万代島と言ったようで、そのあたりで博覧会が開かれていた。その敷地内に青空ステージが設けてあり、そこが芸能会場だった。黒鳥遊芸団は『なぎなた踊り』を演じたが、成績が優秀ということであとで優勝旗（？　小さかったのでよくわからない）をもらったことを覚えている」。

戦後のクウェート、イラクを行く ❶

まだ続く油田火災の煙で昼間でも真っ暗に

クウェート、イラクを訪れた田代善明さんが語る現地のようす

昨年夏のイラク軍によるクウェート侵攻から始まった湾岸危機も、二月のクウェート解放でほぼおさまり、四か月。本町山田出身で、事業のため長い間クウェートに滞在している田代善明さんは、クウェート侵攻のさい、ほかの日本人らとともにイラク国内に連行されたものの昨年十二月に解放。その後「湾岸戦争」が終わってから、田代さんはすでに三度、クウェートやイラクを訪れています。その田代さんから戦後のイラク、クウェート情勢についてお話をしていただきました。

写真上／ドバイに避難していた友人のクウェート人たちと、ドバイで再会し、会食。テレビ朝日のクルーと。左一番手前が田代さん。写真下／熱えるブルガン油田。右はしが田代さん。

田代善明さんについては、広報くろさき一九八八年四月号や町制施行十五周年記念碑『町は生きている』で紹介したことがある。そこでのプロフィールを紹介すると――昭和二十三年、山田の「焼鮒」で知られる田代家に生まれる。近畿大学で電気工学を学び、四十七年日本物理探鉱入社。五十年スエズ運河拡張工事のためエジプトへ。エンジニアとして実績と人脈を築く。六十一年、クウェートでマイルドセブン・クウェートという日本のたばこや弱電機などを取り扱う会社を設立し、現在同社社長。

●クウェート侵攻の渦中に

昨年、世界を揺るがせたイラクによるクウェート侵攻のさい、田代さんはほかの在クウェート外国人らとイラクへ連行された。そして四か月後の十二月九日に解放され、日本に帰国した。これらのことについては新聞などでも取り上げられたので、ご存じのかたも多いだろう。

その後、今年の一月十九日にアメリカ合衆国を初めとする多国籍軍の攻撃により、いわゆる湾岸戦争がぼっ発。一月後、イラクの降伏により戦争は終わった。

戦争が終わってすぐ、田代さんはクウェートに向け出発した。クウェートの友人たちや自分の会社がどうなったのかを確かめるためである。三週間ほどいて、また日本へ。さらに四月から五月にかけて約一月ほど、今度はテレビ朝日の取材も兼ねてクウェートとイラクを再び訪れた。

●町中に人の姿が見えない

――あちらの方の印象はいかがでしたか。

「町に人の姿が全然見られないことが一番、印象的でした。それと、ホテルにいる人間というのが、報道関係者ばっかりでしたね」

――テレビ朝日の取材に同行したということですが、どのようなことを？

「現地の人との通訳をやりました。あと現地の人にアンケートもしかけました」

その取材された内容は、ニュースステーションで報じられ、また田代さんも出演した。番組では、クウェート人に日本についてのアンケートも行ったが、これは田代さんのアイデアによるものだとか。

（意外と日本に好意的な結果が出ていた）

●油煙で砂漠に草が生える

――油田の火災がすごいようですね。

「現在もまだ六百くらい燃えているということです。全部消えるのに一年くらいかかるらしいですね」

――空気のにおいなんかも…

「ええ、油くさくて、服もすぐにススと油で真っ黒になります。頭は砂と油でギットンギットンになりますしね。それから風向きにもよりますが、一週間に二、三日は真っ昼間でも、油田火災の煙のために夕方みたいに真っ暗になるんですよ。それで、日光が当たらないため、涼しくなって砂漠に草が生えてきているところもあります」

――クウェートの復興の具合はどうですか。

「まだまだですね、二百万人いたのが三十万人になってしまったわけですから。それに国内も安定していませんし」

次号では、アラブ世界から見た日本の姿や今後の中東情勢などについての田代さんのお話を掲載する予定です。